

# JOMA 通信

Japan Overseas Missions Association



海外宣教連絡協力会

広報

No.62号

## 「神さま、あなたは JOMA に何を期待しておられるのでしょうか？」

JOMA 役員 (JEA 担当) 永井敏夫

ルカの福音書 5 章に、深みに漕ぎ出して、網をおろして魚をとることが記されています。網と言っても、網を作り、舟に乗せ、投げ、引き上げ、魚を取りだし、洗い、繕うなど、様々な行動が必要です。網とは違い、網の一本ずつは弱いですが、互いにつながって網となっていてこそ使えます。

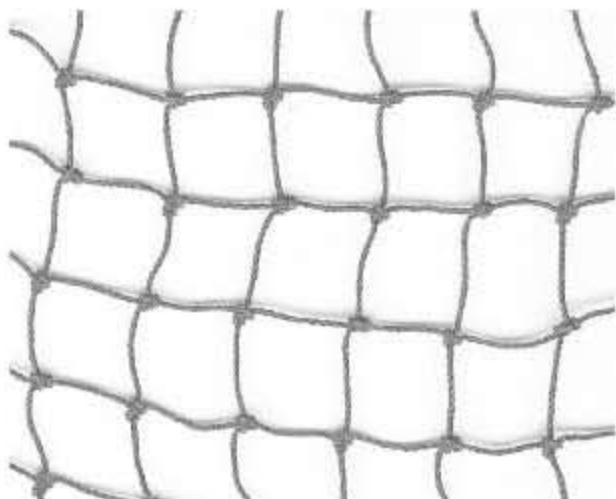
JOMA が発足して今年で 38 年目を迎えます。各教団の宣教部門と各宣教団体、そして支援会などが加盟しています。それぞれの個性、特徴を認めつつ共在し、協力していこうという理念が設立の時からずっと根幹にあります。今までさまざまな努力や試みがなされてきたことは感謝ですが、宣教のための協力があまり具体的な形になりにくいさまざまな事情があったのかもしれない。

それぞれの加盟団体は、気をつけないと点のままになってしまいがちです。点は大きくなっても点のままです。点と点とを結んで線にし、それをつなげて網としていくことが、今こそ求められているのではないのでしょうか？ 私たちはそれぞれに「深みに漕ぎ出して魚をとる」宣教をしています。網を投げたり、引き上げたり、網を修繕する時に、さらに助けが必要な場合は

ないのでしょうか？ 団体の試行錯誤や宣教師の喜怒哀楽などは素直に分ち合われ、また各種の情報やアイデアは共有されているのでしょうか？ 分ち合い、共有していくことが、宣教の網作りや補強や、網を投げて引き上げていくことにつながっていくと私は思います。こうしていく中で、私たちは「ほかの町々にも、どうしても神の国の福音を宣べ伝えなければなりません。わたしは、そのために遣わされたのですから。」(ルカ 4:43) とおっしゃったイエスさまの心に、より一歩近づいていけるのではないのでしょうか？



私たちは無意識のうちに、まず成長していくことを考えたり、先細りしないように踏ん張っていたり、今までの伝統に沿って動いているかもしれない。自分たちででき、各団体間での協力の必要を特に感じない場合もあるかもしれません。でもイエスさまの宣教の情熱に私たちがこれからも応えていくために、JOMA の「連絡協力」が具体的な場面でなされていくことを、私は期待しています。もしかすると、JOMA でなくても他の団体や機関が受けとってスタートできる領域もあるかもしれません。まずは JOMA が日本の各教会にさらに仕えていくという使命を中心に据え、主の「どうしても」とい心に、私たちも「どうしても」応答していくという基本姿勢を失わないことが必要でしょう。そして宣教のさまざまなニーズと情報の受け皿になっていけるように、主に祈りながらアイデアを出し合って実際に動き始めたらどうでしょうか？ 例えば以下にあげたような具体的な動きが、やがては日本の諸教会がさらに意欲を持って宣教に関わっていくことにつながっていくの



ではないでしょうか？

主への信頼、そして枠を越えての具体的な協力により、宣教の主の栄光を帰していくためにJOMAは存在しているのだと思います。JOMAは「宣教をしている」人たちのクラブのような集まりではなく、「教会が宣教に取り組むために使っていただく網」でありネットワークなのです。「神さま、どんなことをJOMAに期待しておられるのですか？」といつも問いかけながら、次の次元を歩み始める時ではないでしょうか？日本の教会が宣教にますます関わっていくために、JOMAがアシスタ的な役割を担っていくことが、神さまから求められているように思うのです。

協力の可能性を求めての提案（順不同）

- ・宣教師のデプテーションの情報を紹介し、アレンジする。（特に地方の教会）
- ・デプテーション中の宣教師が不在の期間に、宣教地の奉仕者をアレンジする。
- ・宣教地体験学習訪問のニードを知り、アレンジする。
- ・インターン生を各団体間で受け入れるアレンジをし、育てていく。
- ・宣教に重荷のある人たち向けの異文化トレーニングを共催する。
- ・宣教師たちのリトリートのアレンジをする。（日本、または海外）
- ・カウンセラーやカウンセリング諸施設の情報を紹介をする。
- ・神学校、聖書学校で異文化宣教の授業をするための人材を提供する。
- ・宣教についての書籍の翻訳やセミナーを共催し、諸情報を発信する。
- ・宣教大会やミッションフェスタ的な催しを他団体と共催する。（特に地方の教会）



証：JOMA宣教セミナー～神様の介入記念日～

松崎ひかり（アンテオケ教会）

今の自分があるのはその一端をJOMAに負うと言ったら、ちょっと大袈裟でしょうが、世界宣教と自分との関わりを思う時、91年のJOMAによる「若者のための海外宣教セミナー」で主の声を聞き、宣教奉仕者としての今に至っていることは、間違いありません。

米国の大学留学中に、世界宣教という明確な方向付けを受けたのですが、働きや団体の多様性、選択肢の多さに、逆に迷ってしまった私は、帰国後とりあえずOLをしながら教会の奉仕をしていました。仕事も奉仕も随分祝福されてはいましたが、心の片隅には、人生で本当にやるべきことをしていないという思いが常にありました。神のみ心がわからないまま月日だけが経つうちに、同居していた祖母の介護を家族全員が交代する毎日となって、いつ外へ奉仕に出られるようになるのか、見当もつかなくなりました。祖母がいよいよ寝たきりとなって入院し、付き添いの人を雇って24時間体制の在宅介護から解放された頃、偶然JOMA主催の宣教セミナーがあることを知り、祖母の容態を気にしつつも、なんとか何かの方向性を得たくて参加しました。

セミナーの間中私は、祈る度に「外へ出なさい、今がその時だ」と神様に迫られている気がしたのですが、毎回「もちろん出たいのですが、おばあちゃんのことを放って行くわけにはいきません」と答えては心中葛藤していました。そんな二泊三日の最後の集会を終え、閉会の祈りの最中、またしても主が「今こそあなたが外へ出る時だ」と語られ、私も前と同様に答えていた時、誰かが私をつい

て「電話ですよ」と言うのです。急いで出てみると、祖母がついさっき召されたとの母の声。それを聞いた瞬間、これが私の葛藤に対する主の答えだと、一片の疑いもなく悟りました。当時、私が日本での社会人生活から海外宣教の奉仕へと踏み出せなかった理由の一つは祖母のことであり、それを突然召すという形で、もの見事に解決を下さったのでした。こうして3月2日は、私の家族に信仰を伝えてくれた祖母の召天記念日であると共に、世界宣教奉仕への具体的参加へ向けて、迷い混乱していた私を押し出してくれた、神様の介入記念日となりました。



その年の秋に最初の一步踏み出して以来、複数の団体・働きを通し、様々な地での宣教に奉仕してきて20年近くになります。これまでの導きの過程で出会った出来事や聖句の語りかけを思い出す毎に、自分は宣教大命令を生き方とするのだということ、そしてそれが主の壮大な計画の一端であることを再確認させられます。中でもあのJOMAのセミナーの終わりに受けた主からの促しとそのタイミングは、実に特異なものでした。その場としてJOMAが用いられたのも主の摂理でしょう。これからも、日本の教会による世界(グローバル)宣教(ミッション)の日本におけるハブ、また宣教協力・協働の先導役としてのJOMAの、積極的な活動展開に大いに期待をしています。

# 世界の地域特集 6 南アジア

## パキスタン・イスラム共和国 -Islamic Republic of Pakistan-

田中久美子（アンテオケ宣教会）

パキスタンは1947年インド帝国から分離独立、イスラム教国として建国し正式国名はパキスタン回教共和国です。全人口の97%がイスラム教徒、キリスト教徒は1-2%です。独立以来カシミールの国境問題でインドとの外交が困難となっています。パキスタン人はヴィザを持ってインドを訪問し帰ってくるのですが、パキスタン在住の外国人は一度インドに出国するとパキスタンへの再入国は出来ないという制限があります。信教の自由が保障されキリスト教徒の礼拝が守られていますが、同時にイスラム法がありイスラム教徒のキリスト教への改宗は禁じられています。また冒涇罪という死罪に当たる法律があり、イスラム教創始者モハメッドの悪口に対し適用されます。この冒涇罪からクリスチャンを守る働きがありますが、会話の中でイスラム教の冒涇罪に当たる言葉が誘導される危険を覚えます。パキスタンにはもうひとつの死罪に当たる掟があります。カロカリと称し異性間の不貞に対して適用されます。新聞にカロカリに拠って家族の者が当事者を殺すという記事がよく目に留まります。しかし誤解や不当適用もあり得るのではないかと思います。

す。政府はこの掟を廃止しようとしていますが、部族レベルで強行されています。部族にはジルガという自治組織があり、そこでの決定が人々の生活に直接的な影響を与えています。非常に保守的な地域において、ある結婚式パーティーで花嫁が一瞬目を上げ男性の姿を見たということによって殺されてしまったということも聞きます。保守的な部族において女性が非常に偏狭的な立場に置かれている事を思います。しかしカラチやイスラマバード、ラホール



JOMA通信では特集を組み、世界各地における宣教の状況と必要を順次お伝えしていきます。次回は中央アジア地域を取り上げる予定です。事務局から原稿依頼をさせていただき、各加盟団体からの記事を募集しております。南アジア地域における宣教情報をお持ちでしたら、ぜひ事務局までお寄せ下さい。



を始め都市の生活では一般的な生活様式と言えます。職場の管理職に着いたり社会進出をしている婦人も多くいます。

2001年9月11日以来パキスタンに派遣される宣教師の数が減り、以前に較べて現在のその数が1/4になっています。私はアンテオケ宣教会を通して医療宣教師看護婦としてパキスタンに派遣して頂いていますが、当宣教会がSIM (Serving In Mission) との提携を持ち、その事によってパキスタンにおいてSIM パキスタンとの交わりが与えられています。奉仕地はパロチスタン州クエッタ市にあるクエッタキリスト教病院です。当病院は Church of Pakistan という監督制教会の教団に所属する私立病院です。パキスタンにおけるキリスト教病院は2系統に分けられ、一つは外国の宣教団体による運営で医師はキリスト教であることが鉄則です。キリスト教医師の不在により病院が閉鎖される程です。他の一つは Church of Pakistan の管轄にある病院でキリスト教医師を始め他宗教の医師も診療しますが、院長はキリスト教医師に限られます。クエッタキリスト教病院は後者に属

し、1886年にCMSの団体の下にサトン医師によって創立されました。その後、医療宣教師ホーランド医師の2代目院長を経てパキスタン人医師に院長の責務が委ねられ現在に至っています。この病院の看護学院院長と看護総師長も院長と共にプロテスタントクリスチャンで、イスラム社会の中でキリスト教病院として主にある医療看護業務が遂行される為に指導者としての任を担っておられます。現在、医療宣教師ポント医師ご夫妻始め、病院事務局長とキリスト教病院拡大プログラム事務局長として外国人クリスチャンが労しています。医師を始め、他の医療職種の子クリスチャン同労者の方々が、ボランティアとして加わって下さることを祈られます。

現在、パキスタン国内の北部山岳地帯においてタリバーンが侵略し、北西辺境州のアフガニスタン国境沿い部族地帯でのテロ攻撃があります。クエッタはパキスタンの南西部にあり、際立った戦闘状態には無く、日常の生活が営まれています。聖日礼拝が守ることができる治安が保たれる様、クリスチャン達が信仰に立って歩み、神の国が前進していきます様お祈りください。



## パキスタン

**地理**  
面積 79万6千平方キロ (日本の約2倍)。北部、西部は不毛の山岳。南東部はシンド砂漠。肥沃なインダス川沿いは大規模な灌漑用水網が広がる。

年	人口	増加率
2000年	1億5千6百万人	+0.60%
2010年	1億9千9百万人	+0.54%

**首都** イスラマバード (人口110万人)  
**主要都市** カラチ (約1600万人)、ラホール (625万人)、ファイサラバード (230万人) 等

**民族**  
インドアリア語族 78.8% (パンジャブ系 56.4%、シンド人 11.8%、その他) インドイラン語族 18.5% ドラヴィダ人 1.6% チベット人 0.5% その他 0.6%

**識字率** 38% (実際には約25%) **公用語** ウルドゥー語 **聖書のある言語** 旧新約5 新約6 部分9 進行中16

**経済**  
主な輸出品はスポーツ用品、織物、衣類とヘロイン。農耕地と商業の大部分は一部の裕福な家族によって支配されている。国家収入の約40%が軍事費と核兵器開発に費やされる。人口増加、水不足、土地の不足、アフガン戦争と難民問題、汚職などが経済活動の妨げとなっている。国内のインフラは投資不足により劣悪化。イスラム過激主義は国に大きな影響を与え、経済破綻を招きかねない状況にある。一人当たり平均年収約5万円。

**宗教**  
憲法に違反するにもかかわらず、クリスチャンやヒンズー教徒に対してさえもイスラム法が適用されるケースが増えている。これは多数派であるスンニ派ムスリムがシーア派ムスリム、アフマディーヤ教団、ヒンズー教徒、クリスチャンを迫害するのに使われている。その一方、政府は少数派に対して宗教的自由が法の下で保証されていることを繰り返し宣言し、驚くほどの自由が与えられているという側面もある。迫害指数世界第17位。

宗教	人口比	増加率
イスラム教	96.08%	+2.8%
クリスチャン	2.31%	+3.7%
ヒンズー教	1.50%	+2.8%
バハイ教	0.06%	+6.6%
その他	0.03%	+11.5%
伝統民族宗教	0.02%	-5.2%

**祈りの課題**  
イスラム教は国の経済と社会的結束に深刻なダメージを与えてきた。女性や少数派の人権は軽視され、司法制度が曲げられ、恐怖と暴力をもたらしている。増加するイスラム主義の学校は、次世代を担う若者たちにインドや西洋、クリスチャンに対する憎悪を植え付け、イスラムのために戦って死ぬことを激賞している。このイデオロギーが覆され、影響が絶たれるようお祈りください。  
この国での宣教は1833年以来続けられ、キリスト教と関連施設は社会に強い影響を与えてきた。特に1890年から1930年にかけてヒンズー教の特定カーストから大勢の人が主に導かれ、1904年にはリバイバルが伴った。しかし、ムスリムの中でクリスチャンになろうと考える人は少ない。教会は最初、パンジャブ州のヒンズー教徒の間でダリットあるいは「不可触賤民」と呼ばれる人々やシンド砂漠の部族民を多く導いたため、そのような下層の人々からなる教会を多くの人は軽蔑している。文化、宗教、歴史の上での障害を取り除かれるようお祈りください。

※ Operation World 21 世紀版より一部抜粋・翻訳

# インド共和国 -Republic of India-

## 「一粒の麦となって」

ミシル千世美（アンテオケ宣教会）

インドといえば、最近のテロ事件などの惨劇を思い出されるかもしれませんが。小さいものも含めると、民族紛争等のニュースは絶えません。それはインドという国が、その内側に複雑な多様性を抱えている国であるということを示しています。

インド北部の、中国国境と接するヒマラヤ山脈を臨む谷あいにある小さな町ダラムサラ。そこには、ここはチベット？と思わせるような一角があります。ダライラマが君臨し、世界中から人々を引き寄せているチベット難民地区です。そこでは、実際のチベットで失われつつあるチベット文化が、それに逆らうように固持されています。今や、インドの多様性の一つとなり、既に難民3世に及び、各地に難民地区を築いています。チベット仏教も、発祥の地に舞い戻り、勢いを増している様相です。

チベット宣教に召されたインド人の夫と私は、その集落に住み、当初チベット語への聖書翻訳に取り組んでいました。神様は、拙ないその翻訳本を用いて、一人の修行僧を救いへ導いてく

だしました。夫がこの地に入って4年目の初穂であり、ダラムサラで初のチベット人受洗者でした。数知れない多くの人々の祈りが積み、チベット仏教の只中に、聖霊が降ってくださった瞬間でした。

私達は、彼のために小さな部屋を借りて、毎日そこで聖書の学びを続けました。多方面で活躍していた有能な修行僧だったゆえに、迫害は後を絶たず、精神的ストレスにも襲われるなど、様々な試練に立ち向かわなければなりません。しかし、いずれも彼をキリストから離すことは不可能でした。それどころか、危機を証の機会へとしていきました。昨年、私達は彼をフィリピン神学校に送り出すことができ、現在彼は将来に備えて学びを積んでいます。救わ





れても、迫害などで指導者にまで成長していくことが難しいチベット宣教の現状を、打破していく器として主に用いていただけるよう、祈っています。

そして、彼を送り出した後、神様は新しい道を開いてくださいました。薬物、アルコール依存者、HIV感染者の援助活動です。残念なことに、チベット人の間ではびこっている問題です。多くのチベット難民にとって、ダラムサラは通過点であり、外国へ脱出していくことが目標です。そのために、家族が離散することも疎いけません。インドに残っても、仕事の数はしれています。難民社会のスポンサー制度が、労働意欲をそいでいる現実もあります。そして、ダライラマが亡くなったらどうなるかわからない、という将来への不安がいつもあります。このような50年に渡るチベット難民社会の歪の現象のひとつが、薬物、アルコール問



題とも言えます。今はもう亡くなってしまった一人の薬物依存症かつHIV感染者であった青年との出会いを通して、この問題を知るようになりました。

しかし、本格的にケアホームを借りて活動を始めたい、と夫から言われた時、私には、恐れと不安が湧いてきました。「一粒の麦となって死になさい。」と主に語られて、やっと従っていくことができました。

それから3年。これまでにケアホームに滞在した青年は20人近く。スタッフも雇うことが



できるようになり、NGOとして政府登録もしました。昨年は、ギフトショップを開き、収益金を働きにささげるだけでなく、依存から立ち直った者に仕事を提供していく機能を果たし、より地域に浸透する場となっています。このような展開を神様以外に誰が知り得たでしょうか。約束どおり、実を結んでくださっているのです。

しかし、実際の働きは、決してスムーズではありません。依存症から立ち直っていくことは一朝一夕にはいかず、行きつ戻りつです。現状に囚われると、気落ちさせる要因だらけです。それでも、神様は私達に人を送り続けてくださっています。その一人一人が、人生をやり直していくことができるように、彼らの命を造られた神様と出会うことができるようにと祈り続けています。

何よりもまず私自身が、いつも主の御声に聞き従い、主に実を結んでいただける一粒の麦で者であるようにと、祈っています。

どうぞ、インドの片隅で進められているこの働きのために、お祈りくださいますようお願いいたします。



# 第五回日本伝道会議

9月21日(月)から24日(木)まで、札幌で第五回日本伝道会議が開催されます。沖縄で開催された前回の伝道会議(2000年)では、「和解の福音を共に生きる」というテーマでさまざまな発表と討議がなされました。今回は「**危機の時代における宣教協力**」というテーマのもとに、**15のプロジェクトチーム**が準備をしています。

世界宣教関係のプロジェクトとしては、「**ディアスポラ宣教協力**」があります。このプロジェクトには、鹿島義喜(香港 JCF)、青木勝(DNJ:ディアスポラ・ネットワーク・フォ・ジャパニーズ)、横山基生(東京新生教会・在欧日本人宣教会)、松崎ひかり(アンテオケ宣教会)、永井敏夫(JOMA・JEA宣教委員会)が委員として関わっています。またアドバイザーに、米内宏明師(国分寺バプテスト教会)、渡部伸夫師(町田ホライズンチャペル)、高田正博師(日本ウイクリフ)を迎え、提言をいただいています。

JOMAに所属する宣教師だけを見ても、約20%が日本人伝道、日本語伝道に関わっています。世界には400を超える日本語教会・集会有ると言われていますが、日本の教会がこれらの実態を把握するまでに至っていません。このプロジェクトを通して、ひとりでも多くの方々がディアスポラ宣教の歴史と現状を知り、課題を共に受け止め、重荷をもって、とりなしのお祈りに加わっていただけたらと、委員会では心から願っています。以下、目的と骨子をご紹介します。

## ※目的

- 宣教師、帰国者にやさしい教会の牧師・海外経験の信徒リーダーを激励する。
- 国内一般の教会牧師や国内信徒リーダーを啓発する。
- 宣教協力における内外縦横連携の実態と将来への展開を取りまとめる。

## ※骨子

- **実態の把握**  
世界各地でなされているディアスポラ宣教協力や帰国者フォローアップの変遷と取り組みを把握します。
- **連携の推進**



世界の潮流を理解しつつ、次世代課題に向け各地域でなされているさまざまな連携をさらに推進します。

### • 変革の鍵

ディアスポラ宣教協力が、日本及び世界宣教の変革の鍵になることを目指して行きます。

＜対象：ディアスポラ宣教協力は、海外在住邦人への宣教と帰国者へのフォローアップを対象とし、ディアスポラ外国人(特にアジア人)も対象範囲。＞

- ◇ プロジェクトの時間帯(全プロジェクト共通)  
→9月22日(火)と23日(水)10:15開始。  
12:00終了。

尚、当プロジェクトでは9月22日(火)14:30から、「ディアスポラ宣教協力・神さまの視点から見直そう。」というタイトルで分科会を開催予定です。

- ◇ 備考：3月15日から、以下のウェブサイトからの申し込みが始まっています。  
→ <http://jce5.net>

文責：永井敏夫(ディアスポラ宣教協力プロジェクト委員)

## JOMA総会

開催のお知らせ

■日時：2009年4月21日(火)

午前11時より午後3時半まで

■会場：日本アソシエーション・オブ・ゴッド様 中央聖書教会

東京都豊島区駒込3-15-20

(JR山手線駒込駅下車徒歩10分)

※行き方は、下記地図参照

■連絡先：JOMA事務局

担当：坂庭裕子姉

■プログラム：

11:00-12:00：宣教セミナー

「日本発の世界宣教をめざして～真の相互協力の構築～」

12:30-13:30：昼食をとりながら加盟団体紹介

13:30-15:30：総会議事

2008年度事業及決算報告

2009年度事業及予算審議

2009年度役員選出

その他



## JOMA宣教セミナー

■テーマ：「日本発の世界宣教をめざして」

～ 真の相互協力の構築 ～

■発題者：松崎ひかり氏 (アンテオケ宣教会)

発題を受けて、ディスカッションの時間をもちます。JOMAの今後の活動のあり方を、共に真剣に語り合いたいと思っています。加盟団体それぞれから複数の参加者が与えられ、活発なディスカッションがなされ、それをもとにJOMAの明日の働きに結びつけたいと思っていますので、よろしくお願いいたします。

### 総会・宣教セミナー会場地図



## 第5回日本伝道会議 JOMAシンポジウム

ご案内

JOMAは今回の日本伝道会議でシンポジウムの時間を持つことが許されました。日本宣教の急務が叫ばれて何年も経ちつつも救霊が進まない中であって、海外宣教に時と財と人材を注ぐことに躊躇を覚える声を聞きます。このような状況下にあっても、主が私たちを世界宣教に召しておられることは変わりありません。日本伝道会議が開かれる機会に、共に「主が求めておられる世界宣教」について考え学び祈りましょう。



以下のようなプログラムでシンポジウムを持つ予定です。JOMA諸団体またその関係者の皆さんが振るって参加して下さることを心から願っています。

とき：2009年9月22日(火)

午後2時半～4時半

テーマ：世界宣教再考

～主が求めておられる世界宣教とは～

宣教報告・発題者(予定)：

佐藤浩之宣教師 (南米宣教会)

福田 崇宣教師 (日本ウイクリフ聖書翻訳協会)

木下理恵子宣教師・佐味湖幸宣教師

(OMF国際伝道日本委員会)

発行：海外宣教連絡協力会

発行者：横山 基生

住所：〒244-0842

横浜市栄区飯島町 2441-10

Tel.045-891-7769

Fax.045-894-2121

e-mail: jomaoffice@yahoo.co.jp

ホームページ: www.joma.mydns.jp

郵便振替：海外宣教連絡協力会

00160-7-106631